

# 国際シンポジウム 「グローバル・ウーマン・リーダーズ・サミット」 女性が輝く、社会が輝く



日本経済新聞社グループが、女性がいきいきと働くことで社会を活性化し、経済成長につなげることを目的に今春スタートした「日経ウーマノミクス・プロジェクト」。その一環となる国際シンポジウム「グローバル・ウーマン・リーダーズ・サミット」を7月2日、渋谷ヒカリエで開催する。最近、「LEAN IN (リーン・イン) 女性、仕事、リーダーへの意欲」という著書を出した米フェイスブック COO のシェリル・サンドバーグさんが基調講演、日本を代表する起業家の1人である南場智子さんが特別講演する。また、この2人に「ウーマノミクス」の提唱者であるキャシー・松井さんと早稲田大学大学院教授の川本裕子さんを加え、パネルディスカッションを行う。パネリストの一人、川本さんに話を聞いた。

——シェリル・サンドバーグさんの著書をどう受け止めましたか。

タイトルの「LEAN IN」は一步踏み出せというメッセージです。シェリルは将来の大統領候補と目されるなど、世界でいま最も脚光を浴びている女性の一人で、その華やかなキャリアから自分とは違うと思う人も多いかも知れません。

## セミナーのご案内

日時 ..... 7月2日(火)19:00～  
場所 ..... 「ヒカリエホール」(東京・渋谷)  
定員 ..... 850人  
参加費 ..... 無料  
主催 ..... 日本経済新聞社

## 基調講演「LEAN IN 勇気ある一步が社会を変える」(仮題)

### 講師: シェリル・サンドバーグ

Sheryl Sandberg

全米ベストセラー「LEAN IN」の著者で、米フェイスブック最高執行責任者(COO)。フェイスブックに加わる前は、グーグルでグローバル・オンライン・セールスおよびオペレーション担当副社長、財務省主席補佐官を歴任。夫デーブ・ゴールドバーグと2人の子どもとともにカリフォルニア北部に住む。LEAN INの日本語訳版は日本経済新聞出版社から6月末に出版予定。



## 特別講演「ことに向かう力 ダイバーシティで求められるもの」

南場智子(なんばくともこ)

ディー・エヌ・エー(DeNA)取締役・ファウンダー。新潟市生まれ。津田塾大卒業後、1986年マッキンゼー、アンド・カンパニー入社。90年ハーバード・ビジネス・スクールでMBA取得、96年にマッキンゼーでパートナー(役員)に就任。99年同社を退社してDeNAを設立。2011年、病気療養中の夫の看病に力を注ぐため、代表取締役社長兼CEOを退任、代表権を譲る。著書に「不格好経営—チームDeNAの挑戦」(日本経済新聞出版社)。



## パネルディスカッション「ウーマノミクス 女性経済の可能性と未来」(仮題)

上記2人に加え、キャシー・松井さんと川本裕子さんが参加します

キャシー・松井(きやしーまつつい)

ゴールドマン・サックス証券チーフ日本株ストラテジスト。カリフォルニア州生まれで、ハーバード大学卒、ジョンズホプキンズ大学院修了。日本輸出入銀行(現国際協力銀行)ワシントンDC事務所、パークリーズ証券を経て、1994年ゴールドマン・サックス証券入社。99年に「ウーマノミクス」という概念を用いて、女性の労働力拡大が日本経済に与える影響を分析したレポートを発表して注目を集め。



でも、シェリルさんが抱える苦労は本質的には女性にとって世界共通で、シンプルなものだと思います。「キャリアは梯子ではなくジャングルジム」「仕事と家庭は二項対立ではない」という言葉には、私も大いに共感を覚えました。企業社会の様々な場面での上司・同僚・部下とのあるべき関係や発言などが経験とともに語られ、リーダーシップ論・コミュニケーション論としても有益です。

ただ、日本とアメリカでは環境がだいぶ違います。日本の国の資源配分は中高年層に偏っていて、社会保障費の中で大層を占めるのに、育児支援などは数パーセントに過ぎません。「若い世代の育成を」「将来の世代にツケを残すな」とかけ声は大きくて中高年偏重の現実は放置されたままです。限られた国家の資源を社会保障と産業振興やインフラ整備にどう配分すべきか、という構造問題もあります。こうした問題についてシェリルさんがどう考えるか、ぜひうかがってみたいと思います。

——確かに、日本での女性の社会進出は動きが鈍いですね。

パネリストの一人、キャシー・松井さんは10年以上前から「ウーマノミクス」を提唱しているのに、全然進まない。高齢化の負担増が懸念され、一人でも多くの働き手が必要な今、税金も含め巨額な教育投資を受けてきた女性が外で働かないという現実はとても「もったいない」ことです。それなのに、日本の政治経済の指導層には基本的に伝統的家族觀が根強く、本気で社会を変えようとする危機感は感じられません。

ただ、女性問題だから女性の力だけで解決を目指すというのはちょっと違うと



川本裕子(かわもと・ゆうこ)

早稲田大学大学院ファイナンス研究科教授。東京生まれ。東大を卒業後、東京銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に入行。1988年、英オックスフォード大学大学院経済学修士を修了後、マッキンゼー東京支社に入社。2001年、マッキンゼー東京支社シニアエクスペートに。りそなホールディングス、ヤマハ発動機などの社外取締役を経て、現在、伊藤忠商事、日本取引所グループの社外取締役を兼任。

思います。ダイバーシティ(多様性)というテーマで、外国人や若い人の活用などと一緒に考えていった方がいい。それと、理解のある男性経営者、リーダーをどんどん応援団に引き込まないとダメですね。よく、女性には女性のメンターやロールモデルが必要という声を聞きますが、ピンと来ません。男性だってそんなに同性のメンターやロールモデルを必要していないんじゃないですか。

——成功のキーワードは?

「楽しくやること」。楽しくやっていると、枠を超えて人が集まってくれるし、いいアイデアもわきます。枠をはめないことが大事で、企業の中で女性推進室の室長に女性を置いているところが結構ありますが、それだと展開はないですね。「えっ、この人が!」というような男性エリート社員を持っていて、3人くらいのチームにして、ものすごく楽しそうに仕事をすれば、みんなもハッピーになるし、会社のパフォーマンスも上がります。人事配置ですごく変わる可能性はあると思います。

お申し込みは、日経サード・オンラインから